

定家本『土佐日記』の表記について

望月, 正道
九州大学大学院 (修士課程)

<https://doi.org/10.15017/12059>

出版情報 : 語文研究. 51, pp.21-25, 1981-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

定家本『土左日記』の表記について

望 月 正 道

今日、平安期の文学作品は、定家自筆本が事実上の孤本といえる『更級日記』をはじめ、藤原定家の書写を経た形で読まれているものが多い。したがって、定家の書写がどのように行なわれたかは、無視することのできない問題である（小松英雄氏の「藤原定家の文字づかい——」を」「お」の中和を中心として——」言語生活272号（昭和49年5月）はこの問題を扱ったものである）。

ところで、『土左日記』の場合には、他の文学作品とは事情が異なり、紀貫之自筆原本が長く後世に伝わって、定家・為家・宗綱・実隆の少くとも四人により、それぞれ直接に原本から書写されている。なかでも為家本（現存せず）を転写した青谿書屋本は、漢字と仮名の書き分けや仮名の字体にいたるまで原本の姿を伝えるものと考えられている。この青谿書屋本と多くの異同を有する定家筆本は、『土左日記』本文を考えるのにはそれほど役立たない。しかし、原本に臨んだ定家が、それをどのように書写していったかを知る上では、またとない貴重な資料といえるだろう。

定家筆本『土左日記』のこのような面については、既に次のような論がある。清水義秋氏は、原本の仮名書きに対して定家が充当した漢字を検討して、二日間にあたった書写の一日目と二日目とは

書写の際の注釈意識が変化していることを示しておられる（「定家の用字と注釈意識——漢字の場合——」相模工業大学紀要七——（昭和48年3月）。また小笠原一氏は「「又」と「まだ」・「事」と「来」と——定家自筆本に関して——」学芸国語国文学第八号（昭和48年6月）の中で、定家の他の自筆本に現われない仮名や他の定家自筆本にもあるものの多用されない仮名などの分布から、三六枚ウ二行目までを一区切として「書写の途中で転写の方針に大きな変更があった」としておられる。

ここでは、同じく仮名字体の問題ではあるが、小笠原氏の扱ったような特殊な字体ではなく、より機能的な書き分けの問題、具体的には「布——ふ」の使い分けについて考えてみたい。

「布」と「ふ」について、たとえば『更級日記』でその用法を見てもみると、

布かき河（三ウ）、布もと（一一オ）、布み（一四ウ）

おもふ（一ウ）、いふ（二オ他）、とふ（八オ）、をふ（同）
など、語頭とそれ以外の位置という使い分けがあるようである。

試みに初めの15丁における「布・ふ」の使用状況を表にして示せ

ば次のようになる。

字	体	語	頭	語	頭	以外	合	計
合	計	18	43	61	布	16	6	22
	ふ	2	37	39				

語頭以外に「布」が使われているものは、

うち布き(五オ)、くんし布しぬ(五ウ)

といった複合動詞の場合、

ゆ／布きり(二ウ)、ひとりこちつ／布やき(六ウ)

とのいった行頭の合場多い(行頭に「ふ」が見えるのは、一六ウ、

一七ウ、四九オの3例のみで、一七ウは変え字)。その他、

さ布らふ(一五オ、五八ウ)、さ布らひて(六九ウ、七五オ)、

中将のし布(九ウ)、ち／布の山(四四ウ)

などがあるが、「さ布らふ」はこの語に関する特に習慣的な用字と見なせるから、例外はかなり少いといえそうである。

一方、「ふ」を語頭に用いたのは、

東ふけは(六ウ)、雪ふり(一七ウ)、あられふりみたれ(同)、

あめふりくらいたる(四三オ)

など、「雨」「風」などの主語が直前に明示されている場合が多い。

ふしの山(一三ウ)

といった例外もあるが、原則的には語頭以外の位置といえよう。

定家筆「土左日記」では、フの仮名は次のように使われている。

字	体	語	頭	語	頭	以外	合	計
合	計	77	165	242	婦	3	1	4
	ふ	27	155	182	布	47	9	56

「布——ふ」の使い分けはここでも明らかであるが、「ふ」の語頭に立つものがやや多いが目立つ。そこでこれを検討してみることにするが、その前に、やはり原則からはずれる語頭以外の「布」をみておきたい。

語頭以外の「布」の9例のうち、

み布ね(一九オ)、き／布けりて(二〇ウ)

は複合語、

い／布(二七オ)、かう／布れる(三〇オ)

は行頭、

たてまつりたま／へといふい布にしたかひて(三六オ)

は変え字で、以上5例は意識的に「布」を用いたものである。残る4例は

かそ布れば(三〇オ)、い布へし(三一ウ)、こ布る(三二ウ)こ布る(三三オ)

で、このうち「い布へし」は一筆で書かれているが、これらは特に意図的なものとは思われない。結局、「布」56例中、理由なく原則から外れるものは、4例だけであることになる。

さて、語頭の「ふ」は全27例だが、このうち第一画が直上の文字の最後の画と合しているものが12例ある。

夜ふけぬ(一ウ)、あめふれは(一六ウ)、日をふれは(一七オ)、
るれは又ふるふく風と(一七ウ)、ゆきそふりける(一八オ)、
ゆきのみそふる(一九ウ)、あめふる(三〇オ)、日をふる(三
三ウ)、いやふきに(三六オ)、世をふるやとの(四一オ)、あ
めふる(四二ウ)、夜ふけて(四四ウ)

これらの文字の連続は、それ全体を一つの語句として意識させる書
き方であり、「ふ」で書かれても問題はない。『更級日記』にも類
例があった。この他、連字にはなっていないが、

夜ふけて(二三オ)、あめふらす(一五ウ)、風ふ／きて(三六
オ)

の3例も同様に考えてよい。したがって、問題となる「ふ」の使用
は次の12例である。

ふむとき(一五ウ)、まなこもこそ／ふたつあれ(三六ウ)、
よろこふことふ／たつなし(三七ウ)、かのふなゑひの(同)、
ふなそこ(同)、ふなきみ(三八オ)、ふなゑひしたうへりし
(同)、ふなきみ(同)、ふなきみ(三九オ)、あめいさゝかに
ふりてやみぬ(四二オ)、ふちせ(四四ウ)、

おなしふかさに(四四ウ)

12例中11例までが三六ウ以後に集中して現れている。作品全体の分
量からいえば、三割にも満たない部分に、これだけ集中して現れる
のは何か理由がありそうである。

そこで、今度は三六丁ウ以後に現れる語頭の「布」を調べてみる
と(語頭以外の例は、この範囲には見られない)、

布ね(四三オ)、布／な人(四六オ)

の、わずか2例しか見えないことがわかる(「婦」はこの範囲には
ない)。つまり、三六ウ以後のフは、2例を除いて、語頭であると
否とにかかわらず「ふ」を用いて書写されている。

ここで、青谿書屋本ではフの仮名がすべて「ふ」で書かれている
事実を考えあわせてみると、三六ウ以後は、この青谿書屋本の仮名
字体に、つまり恐らくは貫之自筆原本の仮名字体の用法に、ほとん
ど一致するわけである。

以上見てきたように、フの仮名については、三六丁あたりを境と
して、それ以前には定家独自の「布——ふ」という機能的書き分け
が行なわれ、それ以後では原本の用字である「ふ」が主に用いられ
ている。この「布」「ふ」は、ともに定家筆本においては特殊な仮
名とはいえないものである。これに対して、既に冒頭で触れたよう
に、小笠原氏が、多用されない仮名について調査され、やはり前後
で差があることを記しておられるので、その結果と比較してみるこ
とにする。

小笠原氏は、仮名字母を次の六に分けておられる。これをいくぶ
ん整理して示せば、

一、定家の他の自筆本になく、青谿書屋本にある仮名。

散、保、数、乎

二、他の定家自筆本にもあるものの多用されない仮名で、青谿書
屋本にある仮名。

お、支

三、『土左日記』では変字としてのみ使われ、青谿書屋本には全

く用いられていない仮名。

阿、起、古、亭、登、遊

四、「土左日記」では過半数が変字として使われる多用されない仮名で、青谿書屋本には用いられていない仮名。

伊、具、婦

五、「土左日記」では変字となることは少ないが、多用されない仮名で、青谿書屋本には用いられていない仮名。

須、堂、王、越

六、「更級日記」では、変字以外には行頭に表われないが、「土左日記」では行頭に表われ、青谿書屋本と一致する仮名。

可、利

となろう。一と二は主に後半に、三、四、五は前半のみに、六は後半にのみ表われる（ここでいう後半は、三六ウ三行目から）。今、この六類の仮名を、その仮名が原本に存したかどうか（青谿書屋本に存するかどうか）で分け直せば、

A、原本にあった仮名Ⅱ一と二と六

B、原本にはなかった仮名Ⅲと四と五

となる。Aは主に後半、Bは前半にのみ現れる。つまり、こうした多用されない仮名についても、前半では定家独自の仮名の使用が行なわれ、後半では原本の用字により近いものになっていることがわかる。

清水氏は、書写の一日目（二八オまで）と二日目（二八ウから）

とでは、定家の常用的漢字である「人、山、月、物、心、見、所、風、又、時、神、河、浪、夜、舟、猶、松」の充当率が違う、つま

り一日目が高く、二日目は低いこと、これは、一日目は注釈意識が高く、二日目は原本への回帰性が高くなっているのであること、などを論じておられる。

この注釈意識と原本への回帰性という解釈は、これまでみてきた仮名の場合にも、そのままではめて考えられるであろう。定家は前半ではその本文に対する解釈をより明確に示すような表記を行なっていたのだが、後半に至り、何らかの理由によってそのような丁寧な書写を行なう余裕を失い、より原本に近い表記を残さざるを得なかったであろう。それが、主に変え字などに使う稀な仮名ばかりでなく、「布——ふ」のような機能的な文字づかいにまで及んでいたことは注目される（なお、漢字の充当率は、仮名の場合のようには、はっきりとした変わりめを見せはしないから、二八丁で区分する考え方が唯一のものとはいえない）。

このように「土左日記」を書写していった定家の書写態度は、前半と後半とはかなり異なっている。前半の書写態度は他の定家筆本にも通じるものであり、原本に対して漢字や仮名をどう変えているかがわかる点で、定家の文字の用法の基本的資料となる。ただ、前半といえども「土左日記」にのみ見える仮名があったりすることからもわかるように、完全に原本の用字から自由であることはありえないだろう（中でも、「を——お」に関する定家仮名遣の違例はすべて「乎」で書かれた語であり、「乎きな」（一〇ウ）、「乎ん（媼）」（三七ウ）を除いて、いずれも青谿書屋本に一致する、つまり、原本にひかれて書いた可能性も考えられる）。一方、後半では、変え字などに用いる多用しない仮名はもとより、常に機能的

に書き分けていたはずの「布——ふ」の使い分けまでもが崩れてしまった。が、同じように機能的な使い分けである「か——可」のよ
うなものには、それほど変化が見られないようである。この相違が
何故生じたものか、また、どの仮名が原本の影響をより強く受けて
いるか、などを考えることは、定家の表記をより正しく解釈するこ
とにつながるのではないかと思う。今後の課題としたい。

受贈図書（昭和五十五年四月～五十六年三月）

- 国文学年鑑 昭和53年度
- 国文学研究資料館 宮内庁書陵部
- 図書寮叢刊 二八明題和歌集（下）
- 日本学之論
- 日本学之論発行の会
- 奄美与論島の音楽と習俗と言語
- 山田 実
- 天理図書館の善本稀書
- 反町 茂雄
- 歌聖
- 宇都宮 惟中
- 芸備口説き音頭集 上・中（国語国文学資料集）
- 広島女子大國語国文学研究室
- 青春の横光利一
- 三重県立上野高等学校
- 三重県南牟婁郡のことば
- 中部日本教育文化会
- 文学における風俗
- 梅光女学院大学
- 文学における自然
- 鹿兒島県立短期大学地域研究所
- 松操和歌集 本文と研究
- 木下 美
- 紫式部日記の研究
- 柳 門 舎
- 江戸時代文学誌 第一号
- 久曾 神 昇
- 堤中納言物語 久邇宮本
- 後拾遺和歌集 日野本
- 徳 満 澄 雄
- 我身にたどる姫君物語全註解
- 白川 初太郎
- 文字とことばをやさしくするために
- 中野 三敏
- 戯作研究
- 今井 源 衛
- 源氏物語評論
- 萬葉その後——犬養孝博士古稀記念論集——
- 迫野 虔 徳
- 高山寺典籍文書の研究